

東京夜光

「ユスリカ」

作…川名幸宏

○登場人物

- 柳瀬美知 (27) ……社員
柳瀬沙知 (29) ……美知の姉 パート
五十嵐大志 (28) ……美知の彼氏 社員
柳瀬道夫 (58) ……美知の父
柳瀬幸子 (56) ……美知の母
柳瀬知輝 (22) ……美知の弟 大学生
五十嵐隼人 (31) ……大志の兄 ベンチャー企業社長
五十嵐明香 (30) ……隼人の妻
渡辺自由 (32) ……沙知の元彼

【序幕】

柳瀬家。

郊外にある最寄りの駅までは車で20分。

とても裕福とは言えないまでも、一軒家。
かつては綺麗に揃っていた生垣も、
今ではぶつきらぼうな森のよう。

縁側の穏やかな朝日に照らされて、

柳瀬道夫（58）が何をするわけでもなく

一点を見つめている。

軒下にツバメが巣を作ったらしい。

道夫の視線は虚ろに動き、ツバメを追いかけていく。

ツバメが巣から出て行ってしまふと、

その目はさらに行く場を失くし、虚ろさが増す。

と、差し迫ったように、新聞の端に載る、

パズルに没頭し始める。

それぞれの朝食と弁当の支度をする柳瀬幸子（56）。

その手は常にせかせかと、何かに追われているようだが、
腰が悪いらしい。

思うように歩けていないのを器用さでカバーしている。

幸子 お父さん。

道夫 ……

幸子 お父さん。

道夫 ん？

幸子 薬。

道夫 え。

幸子 薬、飲んだの？

道夫 ああ。

幸子 また忘れてる。

道夫　ちよつとこれ終わってから。
幸子　飲んじゃってよ。
道夫　終わってから飲むって言ってるだろ！
幸子　こないだそれで忘れたでしょ！

大学生の柳瀬知輝（22）が起きてくる。

幸子　あれ、今日一限？
知輝　そう。
幸子　ごめんごめん。
知輝　前期は火曜と木曜。
幸子　火木ね、書いところ。
知輝　いいよ別に、自分で起きてるじゃん。
幸子　起きたついでにあんた洗濯物持ってって。
知輝　んー。
幸子　持ってって。
知輝　んー
幸子　知輝、今日さ、お父さん病院連れてってね。
知輝　……
幸子　今日お父さん、
知輝　無理、予定ある。
幸子　知輝が連れてってくれるから。
知輝　一人で行けるんじゃない？
幸子　あんたねえ。
知輝　鬱って体悪いわけじゃないんでしょ。
幸子　知輝！
道夫　一人で行く。
幸子　またさまよったら責任取れんのあんた。
知輝　なんで俺なの？沙知姉が行けばいいじゃん。

一瞬、風が止まったように。

知輝　……わかったわかった。行くって、行く。

道夫 一人で行くのかなあ。
幸子 お願いね。
知輝 うん。

居間の奥から呻き声が聞こえる。

知輝 今日も始まんのかあ。

呻き声の正体が出てくる、柳瀬沙知（29）。
肉体がこの世のものではないような、
ゾンビのような動き。
徘徊、のち、寝そべってジタバタする沙知。

沙知 んああああー！！！！

3人とも黙る。嵐が過ぎ去るのを待つかのように。
机には、4人分の朝食が準備されていく。
沙知の言葉は、聞こえたり聞こえなかったり。

沙知 んんあああ、眠い、眠い、眠い！！！！だるい、疲れた。眠い、だるい、疲れた。あああ、遅刻、遅刻じゃん、遅刻だし。お母さん！
なんで起こしてくれなかったの！！！！
無視？え、無視？あああああ、だるい、行きたくない。行きたくないよ！なんでこんなに働かなきゃ行けないの。働きたくない。だるい、眠い、疲れた、しんどい。あああもうやだ、気持ち悪い。

二日酔いの吐き気が襲う。

ああ、もう、最悪、遅刻だし、ああ最悪！ 気持ちわる、ったく、あのクソ店長、マジでうざい、なんであんなに飲ませんだよ、バーカ、店長死ね、バーカ、バーカ、アホ、バーカ、ああああ！

たたんである洗濯物を投げ散らかして崩して行く。

今日着る服を騒ぎながら探している。

あれ、靴下、靴下ない、靴下、お母さん！靴下全然揃わないんだけど、え、どういうこと、は？え、靴下！靴下！お母さん！靴下！マジで何考えてんだよあのババア、なんで靴下揃えないんだよボケ！最悪！最悪！んああああアアアアアアアアアアッアあ。

何事もないように朝食をとる3人の食卓を、

沙知は勢いにまかせてひっくり返す。

【1幕】

都心のアパート。

郊外というほど中心部から離れてはおらず、
かと言ってビル群というよりは住宅街。

駅前には昔ながらの商店街。

各駅停車しか止まらないが、

ターミナル駅へ10分もすれば着いてしまう。

2LDKの部屋。3階。

柳瀬美知（27）は大学時代からこの辺りに住み、
それは五十嵐大志（28）も変わらない。

二人は大学の先輩後輩の間柄であり、
社会人になってから、それとなく、付き合い始め、
それとなく、同居し始め、もう3年になる。

その間、1回引っ越したが、便利さと、
比較的家賃相場が抑えられたこの近辺を離れられず、
結局、前の住まいから徒歩5分のこの部屋に決め、
ハイエースを往復させて引っ越した。

休日の午後らしい。

熱心に雑誌を読む美知。
読んでいるのは結婚情報誌。

大志 穴あくよ。

美知 は？

大志 それ。

美知 穴があくって？

大志 え、言わない？

美知 穴があく。

大志 読みすぎて。

美知 え？

大志 いや、だから読みすぎて穴があくっていう。

美知 それ、どういう状況？
大志 ……
美知 あくかなあ。
大志 知らない。
美知 ずるい。
大志 んー。
美知 最後まで付き合っつてよ、そっち発信なんだから。
大志 わかんないもん。
美知 こらー。

じゃれ合う二人。

なぜか二本の指で大志の鼻の穴を塞ぐ美知。

大志 ちょっと、やめてよ。
美知 お仕置き。
大志 息が、でき、る。
美知 いいでしょ、このお仕置き。
大志 お仕置きになつてない。
美知 空いた穴を塞ぐ屈辱を与えているのだ。
大志 確かに、なんかやだわ。
美知 でしょ。
大志 もうやめて。
美知 やだよー。
大志 やめろつて。

大志が美知の手をとって、
抱きつく形になる。

美知 ……ねえ、今日休み。
大志 どっか行く？
美知 行く気ないくせに。
大志 バレた？
美知 朝、一回した。

大志 そだね。
美知 ちよっと待ってちよっと待って。
大志 えー。
美知 だめ。
大志 いいから。
美知 ダメだってば。
大志 んー。
美知 ねえ忘れてるでしょ？
大志 え。
美知 今日さ、服買いに行くって言ったの。
大志 あれ、こないだ。
美知 こないだはこないだ。
大志 また？
美知 え、だって、今度お兄さんたちに会いに行くでしょ。
大志 こないだ買ったやつでいいじゃん。
美知 ありえない。
大志 うちの兄ちゃんだし。
美知 社長さんなわけでしょ。ネットニュースだっけ？
大志 気にしないよ。
美知 だめだめ。
大志 ちよっと待って、その度に服買うわけ？
美知 当たり前でしょ。
大志 はあ？
美知 ねえ、自覚して、結婚するんだよね。
大志 それと新しい服とは関係なくない？
美知 そうかなあ。
大志 明日にしよう。
美知 えー。
大志 というかさ、ご両親に会う日取り。
美知 あー。
大志 え？
美知 そうねえ。
大志 ……この話、いつもそらされてない？

美知 そんなことないよ。
お仕置き。
大志 お仕置き。
美知 え、なんで。
大志 わかんないけど、お仕置きしてみる。

再びじゃれ合う二人。

美知 あー夕方になっちゃう。
大志 うん。
美知 有意義に休みを使えないものかね。
大志 どっか食べに行っちゃう？
美知 服買いに行かないのに？
大志 まだ言ってる。
美知 えーだって。
大志 美知、なに食べたい？
美知 その聞き方ずるくない？
大志 は？
美知 なんか優しいみたいじゃん。
大志 美知、なに食べたい？
美知 えーと、じゃあ、大志のこと食べちゃいたい。
大志 うわ、気持ちわる、よくそんなこと言えるね。
美知 はあ？ムカつく。お仕置き。

再びじゃれ合う二人。

鼻を突き合う。

インターホンが鳴る。

大志 なんだろ？ なんか買った？
美知 え、買ってない。

再びインターホンが鳴る。

大志が出て行く。

美知は結婚情報誌を手にとってニヤニヤして、
そして自分の鼻の両穴に指を突っ込んで、
またニヤニヤしている。

大志が戻ってくる。

大志 あのだ。
美知 なんだった？
大志 あの……お姉ちゃん、いるの？
美知 え。
大志 え？
美知 え？
大志 いや、お姉ちゃん。弟いるのは知ってるんだけど。
美知 ああ。
大志 あの、きてるけど。お姉ちゃん？
美知 は？
大志 いや、だから。
美知 来てるの？
大志 うん。じゃあ、お姉ちゃんなんだよね？
美知 ……
大志 え、どうした？
美知 うん。
大志 ……じゃあ、とりあえず、入ってもらおう？
美知 え……
大志 とりあえず、入ってもらおうか。
美知 ちよっと待って。

大志出て行く。

美知は困惑している。

沙知と大志が入ってくる。

沙知 お邪魔します。

聞き覚えがあるけど、ここにあるはずのない声。

沙知　おう。元気？

　　呆然とする美知。

　　沙知は悠々と部屋を見回す。

沙知　へえ。

美知　え……あ……え

沙知　ごめんごめん、急に来ちゃって。えーと（大志を見て）

大志　あ、すみません、沙知さんとお付き合いさせていただいている、五十嵐大志です。

沙知　美知の姉の沙知です。

大志　……えー、あの、美知？

美知　え？

沙知　あの、本当にいきなりで申し訳ないんだけど、しばらく泊めてくれるとありがたいんだけど。

美知　は？

大志　えー、と、あ、ウチについてことですか？

沙知　え、他にどこか。

大志　そうですね。

沙知　本当に申し訳ないんだけど。いい？

大志　えー、そうですね、いきなりですね。

沙知　少しの間でいいんです。

大志　いやー、え？美知？

美知　無理に決まってるじゃん。

大志　……あのー、あんまりにも急かなって。

沙知　あのね。二人には、先に話しておいた方がいいと思うんだけど。

大志　はい。

沙知　わたしね、余命宣告されちゃって。

大志　はい？

沙知　あ、余命宣告。

美知 は？
沙知 びっくりでしょ？
大志 あの、え？びっくりというか、その、びっくりではありません。
沙知 残り楽しもつかあつて。で、心機一転というかイメチェンとい
うか、大学デビューじゃないけど、余命デビューすることにして。
大志 えー。え。
沙知 迷惑かけないから。
大志 いや、あの、それより、余命って。
美知 大志ごめん、嘘に決まってる。相手にしなくていいから。はい、
帰ってもらっていい？

沙知が診断書を出す。

美知 ……
沙知 ちょっとの間だけだから。
美知 ……え、いや……まっつて。
沙知 いい？いいよね？
美知 ……
沙知 ……ごめんごめん、やっぱりいいわ。ホテル探す。
美知 うん。
大志 いやいやいや。
美知 え。
大志 あの……僕は、大丈夫なんで。
美知 ちよつと。
大志 ウチ、好きに使ってください。お姉さんさえよければ。
沙知 え、いいんですか？
大志 はい、ぜひ。
美知 待って。
大志 いや、もうここは、俺決めるわ。泊まってください。
沙知 ありがと。助かる。じゃあ、お言葉に甘えて。
美知 待ってって。
沙知 レンタカーで来てるの。車に荷物あつて。
美知 え？住む気なの？

沙知 ちよつと手伝つてくれる？そんなに大した荷物じゃないんだけど、駐禁取られるの怖くて。いい？

大志 あ、はい。

沙知 男手助かるわ。そしたら車回してくるね。

沙知出ていく。

大志 ……なんで、隠してたの？お姉さんいるの。

美知 言う必要ないから。

大志 いやいや。ごめん、全然頭整理できてない。

美知 あー、もー。

大志 え？

美知 もう、10年ぐらいしゃべってなかった、もつとかな。あの人と。

大志 あ、別々に住んでて、とか？

美知 いや、シンプルに、超、大嫌いだから。

大志 あー。

美知 ごめん、言葉悪いけど、あいつ人間じゃないのね。

大志 待つて待つて、どうした？

美知 嫌がらせしにきたに決まってるから。

大志 美知さ、そんなこと言ってる場合じゃなくない？

美知 でも住もうって言うてるんでしょ。

大志 え、お姉さんなんだよね。だって余命。

美知 いや、嘘だつて。

大志 こんな嘘つくかなあ。

美知 絶対嘘。

大志 ……でも嘘だとしてもさ、どれだけ仲悪くてもさ、ここまでして

頼ってきてるわけじゃない。

美知 ……いや……

大志が美知の鼻の穴に指をさす。

大志 お仕置き。

美知 やめて。

大志 ……

美知 ごめん、ごめん……まあでも、死ぬんだよね、嘘じゃなかったら、あの人。

大志 ……

美知 それまでなら、なんとか耐えられるかな。耐えるか。そうするか。

大志 美知、本気で俺、怒るよ。

美知 え？

大志 今の、聞かなかったことにする。人として、そんなこと言っちゃ、いけないと思う。

美知 いや、その。

沙知の声 ごめん、大志くん、手伝って！

大志 はい！

大志は許すように美知の肌に触れる。

大志 ね。

大志は出て行く。

美知 人としてって……

美知の手が震える。

それは、怒りなのか、怖れなのか、とにかく震えている。

叫びたい、でも、叫べない。

飲み込んだ叫びが体に押し込められ、

振動は、全身に回る。

【2幕】

○2・1 柳瀬家

夕方。

渡辺自由（32）と道夫が座っている。

お茶をすすりながら沈黙が続いている。

少し離れたところで、知輝が様子を伺っている。

渡辺 ……あの、すみません、いきなり押しかけてしまつて。

道夫 ……いやいや。

渡辺 その、あまりにも、連絡が取れなかったものですから。

道夫 ……いやいや…いやいや。

幸子がお菓子を持って入ってくる。

幸子 すみません、こんなものしかなくて。

渡辺 いえいえ、お気遣いすみません。

幸子 わざわざ、心配して来てくださつて。

渡辺 はあ。

幸子 私たちも、その、沙知に、渡辺さんみたいな人がいるって知らなくて。

渡辺 あ、何も、話してないんですね。

幸子 ウチだと、ほとんど、喋らないから。まあ、しゃべるんだけど、

一人で喋ってるから。

渡辺 そうなんですね。

幸子 本当にあの子。

渡辺 それで、その、余命っていうのは、本当なんですか？

幸子 ……私たちも、実はまだ、よくわかってなくて。

渡辺 そうですか…

さめざめと泣き始める渡辺。

渡辺 ……すみません。沙知に、何もしてあげられてないと思つて。
幸子 いやいや。
渡辺 本当に、情けないです。
幸子 まだ、わからないですから。
知輝 あ、帰つて来た？
幸子 え？
知輝 沙知姉じゃない？
渡辺 沙知？

美知が入ってくる。

知輝 美知かよ。
美知 は？
幸子 なんで帰つて来たの？
美知 なんて、沙知が。
道夫 美知、久しぶりだなあ。
渡辺 あ、沙知さんと、お付き合いさせていただいてます。渡辺です。
美知 あ、沙知の。
渡辺 はい。
知輝 沙知は？
美知 うちにいるけど。っていうか、住み始めてるんだけど。
道夫 今日、泊まつて行くのか？
美知 いや、帰る。
道夫 お母さん、なんか出前取ろう。渡辺さんもいるし。
渡辺 いやいや、お気遣いなく。
美知 大丈夫、要件だけ言つて帰るから。
道夫 お前、正月も帰つてこなかったんだから。
美知 いや、いいつて。
道夫 お母さん、とりあえず、寿司でいいか？うなぎにするか？
美知 だから帰るつて。
道夫 適当に出前とつて。
幸子 はいはい。

幸子が出て行く。

渡辺 ……沙知は元気ですか？

美知 元気というか、ウチでずっとテレビ見てるか、漫画読んでるかですけど。

知輝 なんて？

美知 知らないわよ。あと、やけに明るい。無駄に話しかけてくる。気持ち悪い。

渡辺 病院、連れてった方がいいと思うんです。

美知 そう、それで、話に来て。

渡辺 はい。

美知 とりあえず、お父さん、早く沙知をここに連れ戻して欲しいんですけど。

道夫 ……

美知 ……え？

道夫 ……

幸子が戻ってくる。

美知 え、連れ戻すよね？

知輝 沙知姉こっち帰ってくる気ないんでしょ？

美知 は？

知輝 じゃあ、いいんじゃない？とりあえずこのままで。

美知 いやいや、だって余命。

幸子 美知、病院連れてってあげて。

美知 え、なんで私？

幸子 だって、美知の家にいるわけでしょ。

美知 そうだけど。は？

幸子 あのね、正直、お父さんのことで手一杯なのね。

美知 だって、お父さん新しい仕事始めたんじゃないの？

知輝 いつの話してんの？

幸子 ちよつとやめて。お父さんかわいそうだから。

美知 え、じゃあ、今どうやって生計立ててるの、ウチ？

幸子 ……だから、沙知が。
美知 あ、そういう。
知輝 美知が何もしないから。
美知 は？
知輝 だってそうじゃん。
美知 え、じゃあ、沙知いなくて、ローンとかは？
幸子 知輝が来年、大学卒業だから。ね？
道夫 知輝、ごめんなあ。
美知 あ、そうなんだあ。
知輝 初耳！聞いてない。
幸子 なんのために大学まで行かしたと思ってるの。
知輝 俺、奨学金で学費払ってるし。
幸子 ウチで生活させてあげてるでしょ。あんた誰が作ったご飯食べてるの？その食器誰が洗ってるの？
知輝 勝手にやっただけじゃん。
幸子 は？じゃあ家賃払いなさいよ家賃。
知輝 払うからじゃあ貸して。
幸子 は？
道夫 お父さん貸すぞ。
幸子 黙っててよ。とにかく、知輝が就職するまでは、貯金切り崩すのと、お母さんのパートでなんとかするから。
知輝 いや、俺、来年出てくけど。
幸子 え、じゃあ、ウチどうするの？
知輝 美知が一番稼いでるじゃん。
美知 は？
知輝 美知ウチのこと無視してきたんだから。
美知 無視はしてないでしょ。
知輝 一年に一回帰ってくるかこないかじゃん。
美知 沙知がいて帰ってくるわけないでしょ。
幸子 もう、いいの。美知はうちのこと何も思っていないんだから。
美知 ああそうです。なるべく帰って来たくないって思ってます。だから、なおさら沙知連れ戻した方がいいでしょ。
知輝 だから余命だって。

幸子 沙知の病院代だって、どうするの？
美知 知らないよ。
幸子 知らないってあんたのお姉ちゃんでしょ。
美知 いや、親じゃん。
道夫 なんとかなるよ。なんとかしよう。
知輝 その根拠ないやつやめてよ。
道夫 なんとかするしかないだろ！わかった父さん働き始めるから。
幸子 また悪くなっちゃうから。
道夫 しょうがないだろ！じゃあ死ぬか？
知輝 またそれ始める。
道夫 保険かかっているから。お母さん一人と沙知の病院代ぐらいなんとかなるだろ。俺、死ぬか？
美知 いや、冗談に聞こえないって。
道夫 よし、そうしよう。お父さん死のう。
知輝 やめろって。
道夫 理になつてるだろ。な？
幸子 もう、なんでいつもこうなっちゃうの。
道夫 ほら！いいか？死ぬぞ！
美知 大きな声出さないでよ。
道夫 死ぬぞ！死ぬぞ！

道夫がヒートアップして、
おそらく台所に包丁でも取りに行くのか、
2階から飛び降りでもするのか、
とにかく部屋を出て行こうとした刹那、
渡辺がさつと道夫を止める。

渡辺 あのこと……沙知、余命宣告受けたんですけど……

沈黙。

渡辺 沙知のこと、家族で、なんとかするのが、先決なんじゃないですか？

幸子 それは、そうですね。
渡辺 とりあえず、普通に沙知連れ戻すのじゃダメなんですか？
美知 そう、とにかく、ここに、連れ戻そう。
幸子 ……もう、沙知が、毎日、暴れ回るのに付き合おうの、限界なの。
渡辺 沙知が？
知輝 毎朝、グズりまくってます。結構な緊張感というか。
渡辺 ……
道夫 あの、沙知は、どんな子ですか？
渡辺 ……頑張り屋、ですかね。
道夫 そうですか。
美知 沙知って、なんの仕事してるの？

気まずい間。

美知 え？
知輝 パートと。
美知 と？
知輝 まあ、夜の。
美知 夜の？
知輝 夜の、お仕事、らしい。
美知 え、どこまでの？
知輝 ……
渡辺 最後まで、だそうです。
美知 へえ。
渡辺 はい。
美知 渡辺、さん？
渡辺 はい。
美知 渡辺さんは、それで、いいの？
渡辺 あんまり、よくはないですけど、すみません。
美知 いや、別に謝られることじゃないですけど。
渡辺 僕、なんとか、します。
美知 なんとかって。
渡辺 僕、今回のことで、情けなくって。

道夫 いや、それはこちらが。

渡辺 お父さん、お母さん、僕が沙知を説得してここに連れ戻します。

それで、僕もここに一緒に住んでこのウチ支えさせてください。

沙知の最後を、一緒に、過ごしたいんです。

知輝 え？

いや、そこまでしなくても。

幸子 でも、まあ、ウチとしては、助かるけど。ねえ？お父さん。

道夫 ん？

お父さん、お願いします。

道夫 まあ、好きにしてください。

日が陰って行く。

〇2・2 兄夫婦のマンション・客間

大志の兄夫婦の家。

ネットニュースのベンチャー企業を営む

五十嵐隼人（31）。

タワーマンシヨンの高層階。絵が数点飾ってある客間。

隼人は大志と沙知を引き連れて、

自慢のコレクションを見せようと客間に案内する。

沙知 うわあ。

大志 兄ちゃん、絵また増えた？

沙知 すごい。

隼人 好きだね。ここら辺は最近。

沙知は一つの絵を見つけて虜になる。

その絵に没頭する沙知。

沙知 ……私、これすごく好きです。

大志 へえ、夕日と、蛍？

隼人 蛍じゃないよ。

沙知 え？

隼人 ユスリカっていう。

大志 ユスリカ？

隼人 アタマ虫ってわかる？ほら、河原とかで、よく頭らへんに大群で

飛んでるやつ。

あ。蚊柱。

沙知 そうそう、あの虫。

大志 えーあれめちやくちやイライラするやつ。

隼人 そう、でもさ、綺麗でしょ、この絵。

沙知 はい。

隼人 この大群さ、全部、オスなの、知ってる？

大志 え。

隼人 繁殖期に、メスにアピールするために大群になるの。で、メスは

沙知 たった一匹で飛び込んで、相手を見つけて交尾するわけ。
うわー。

隼人 気持ち悪いけどさ、生きてるよなあって。だって、この虫、成虫
になったら口がなくなってももの食べられないんだよ。もう数日間
の命、必死なわけ。

沙知 はい。

隼人 それが、大群になって、一人のメスを求めるの。

沙知 ロマンチックというか、ドラマチック。

隼人 そう。それに比べて人間って、なんてだらだらと、長々生きてる
んだって話だよ。そう思わない？

沙知 思います。

大志 兄ちゃん。

隼人 いくら長生きしたって、ドラマチックに生きなきゃしょうがない
よね。沙知さんは、何か、必死になれるものある？

沙知 今、探し中です。

隼人 沙知さんは、お仕事は？

沙知 適当に、スーパールのレジ打ちしてたんですけど、恐ろしく退屈な
んでやめちゃいました。

隼人 何か、やりたいことがあつて。

沙知 だから、今、探し中です。

隼人 あ、探し中。

沙知 そうです、自分探しというか。

隼人 じゃあ、そういう勉強とか。

沙知 まあ、そういうのはまだ。とりあえず、楽しもうかなあと思って、
勉強がてら、テレビと漫画で一日終わっちゃうみたいな。

隼人 ああ。

沙知 一日って意外と短いんですよええ。

隼人 うーん、まあ、そういう時間は確かに大切だけど。でもさ、その、
人生100歳時代だつてさ、100歳まであるなんて考えちゃい
けないと僕は思うな。

沙知 はあ。

隼人 明日死ぬと思つて生きなきゃ。

沙知 まあ、そのつもりなんですけど。

大志 兄ちゃん、あの。
隼人 じゃあ、もし、明日、死ぬとしたら、今、何したい？
沙知 んー、今、してます、それ。
隼人 え？いや、だから。
沙知 今、してると思います。
隼人 あ、ん？そっか、えーと。
沙知 はい？
大志 ほら、人それぞれだから。
隼人 なんか、噛み合わないね。僕はね、もっとドラマチックに。
沙知 この絵もらってもいいですか？
隼人 は？
沙知 いや、すごい、素敵だなあって。いただけたら嬉しいんですけど。
隼人 ん？はっはっは。それは、え？
沙知 さすがにそれは無理ですかね？
隼人 それは、そうだね、どうかなあ。
沙知 じゃあこれはどうです？私の一生のお願いここで使うっていう。
隼人 はっはっは。沙知さん面白いなあ。
沙知 私、余命宣告受けてて、そんなに長くないんですよ。今まで使つてこなかったんで、今ここで使います。
隼人 え。
大志 兄ちゃん、その、沙知さんさ。
隼人 え、今。
沙知 あ、もうすぐ死ぬんです。
隼人 あ、えー。
沙知 この絵、もらってもいいです？
隼人 えー……あげますよ、あげます。
沙知 やった。
隼人 あの、え、沙知さん。
沙知 はい？
隼人 探してる場合じゃない。探してる場合じゃないですよ。
沙知 それは、そうなんですけどねえ、なかなか。でも、もうせつかくだから、自分に嘘つかないで生きようって思うんです。
隼人 ……沙知さんに、お願いがあります。

〇2・3 兄夫婦のマンション・リビング

広いリビング。

隼人の妻、五十嵐明香（30）と、美知が話している。

明香 そっかー。

美知 はい。

明香 そうねー。

美知 すみません、お義姉さんにこんな話するのも、なんだとは思ったんですけど、なんか、思わず。

明香 うーん。

美知 このままだと、とにかく辛いつていうか。

明香 病院に連れてった方がいいよね。

美知 それは、そうなんですけど。

明香 10年、だっけ？話してないの。

美知 まあ。

明香 10年って、結構な年月だもんね。

美知 はい。

明香 とはいえ、誰かが、助けてあげないと。

美知 それは、わかってるつもりなんですけど。

明香 何か、変わるかもよ。お姉ちゃんとの関係とか。

美知 どうでしょう。

明香 よし、そしたら、隼人に言って、お医者さん紹介してもらおう。

美知 え。

明香 ね、そうしよう。

美知 いや、そんな。

明香 ジタバタしてるだけじゃさ、なんともならないじゃない。

美知 でも、私がやった方がいいんですかね？

明香 うーん、ひどい言い方だけど、できる人がやるしかないもん。

美知 正直、そんな、どれだけかかるかわからないですけど、費用とか。

姉に、お金があるとも思えないし。

明香 わかった。貸すよ。お金。ね。

美知 え。
明香 だって、しょうがないじゃん。
美知 いや、それはさすがに。
明香 隼人、そういうのにお金出すのは好きだから。大丈夫だと思う。
美知 悪いですって。
明香 そんなこと言ってる場合じゃなくない？
美知 ……
明香 そうしよ。
美知 本当に、すみません。大志と、姉と、話してみます。
明香 うん。
美知 すみません。
明香 嫌な、役回りかもしれないけどね。全く、死ぬのも迷惑かかるの
わかかってほしいよね。
美知 いや、そんな……
明香 お茶入れよっか。
美知 あ、すみません。ありがとうございます。

ここから、明香はキッチンと行き来しながら、
ティーセットでお茶を入れ始める。

明香 ねえ、一つ聞いていい？
美知 はい。
明香 お姉さんの、何が、そんなに嫌いなもの？
美知 え？
明香 そこまで、嫌いになれるのも、すごいなって。
美知 えー。
明香 ねえ、何が嫌いなの。
美知 なんででしょう、全部。
明香 それは、ずるいよ。
美知 えー。なんででしょう。生理的に受け付けられないだけなんですけど。
明香 話さなくなったきっかけとかは？
美知 あー、あのー、川に落とされたこと、だった気がします。
明香 へえ。

美知 学校の帰りに、いきなり、後ろから押されて。

明香 おー、軽い殺人事件だね。

美知 落ちる瞬間、姉が、にやって笑う顔が見えました。

明香 何かの仕返し？

美知 あー。

明香 美知さんが何かしたの？

美知 確か、姉の口紅使ったからって。

明香 ああ、勝手に使っちゃったんだ。

美知 いや、その前に、テレビのチャンネル争いしてて。で、結構喧嘩

した末に、私が折れて、その代わりに、口紅貸してくれるって。

明香 じゃあ、お姉ちゃんが悪いね。

美知 まあ、姉の言い分は、貸すつもりだったのはその口紅じゃないっ

てことだったらしいんですけど。

明香 テレビは、何で争ってたの？

美知 えー、なんだったんでしょ。忘れちゃいました。

明香 そっか。

美知 結構昔のことなので。

明香 でも、そんな、忘れちゃうことで、こんなに嫌いなもの？

お茶が入ったカップを美知の前に差し出す明香。

美知 ……まあ、他にも、いろいろあるとは思うんですけど。

明香 そう。

美知 いや、とにかく、なんか嫌なんです。本当に。

隼人、沙知、大志がリビングに戻ってくる。

沙知 いやいや。

隼人 いや、書いた方がいい。コラム書いてみようよ。

大志 兄ちゃん、話早すぎ。

隼人 だって時間はないんだから。ネット記事なんだけど、その、沙知

さんの今の境遇とか、きつと世の中に刺さるものがあると思うんだよ。

沙知 え、いや、そんな、どうですかね？

隼人 僕はね、直感で人を見るんだけど、いい文章書くと思うんだ。ね、美知さん。お姉さん、たぶん文才あるよね？

美知 知らないです。

沙知 でも、そうですね、初めてのことにチャレンジというか。うん。

沙知 開そうな気がしてきました。

隼人 本当に？

沙知 やってみる。うん。やってみます。私でよかったら。

隼人 よし、ありがとう。

美知 やめた方がいいと思いますけど。

隼人 え、どうした？

美知 ……いや、家族としては、どうかなって？

沙知 え。

美知 あの、お義兄さんが思ってるような美談にはならないと思います。

隼人 別に、そんなつもりはないんだよ。ただ、ありのままを。

美知 ありのままだったら、なおさらダメです。

沙知 えーと、ごめんなさい。この人、思い込みが激しくて。ほら、ネット記事とか、あることないこと書くじゃないですか。それが嫌なんだと思うんです。

美知 この人、外面だけはいいんです。あの、違います。普通に、この人が書くことがってことです。

大志 美知、ちよっと。

美知 いやいや、えーと、どう言ったらわかってもらえますかね。

隼人 いや、どうって。

美知 あの、お義兄さんのために言ってるんです。直感がどのとかって私にはわからないですけど、この人のこと知らないじゃないですか？

沙知 いや、え？

明香 もうやめなあって。隼人もさ、沙知さんに直接言えればいいじゃない。

隼人 え、二人は喧嘩中？

大志 ……あの、もう、10年ぐらい、しゃべってないらしい。

隼人 ドラマチック！え、え、じゃあ、なんで、妹さんのとこに。

美知 嫌がらせに決まってるじゃないですか。

大志 美知、やめなつて。

隼人 え、なんで？

美知 いや、この際言いますけど、私の予想ですよ、私が結婚するってなつて、本当に嫉妬してると思うんですよ。

大志 美知！

隼人 うん、それで？それで？

美知 だから、悔し紛れに、なりふり構わずとりあえず来た、みたいな。昔からそういう人間なんですこの人は。余命っていうのもたぶん嘘です。私に嫌がらせするための口実です。だから、もう、十分こっちは嫌な思いしたんで、早く帰つてほしいって思つてます。

ハッと、呆然と自分を見る周りの視線を察する美知。

美知 ……はい……以上です。

沙知 本当に、本当に、そんなんじゃないんです。あの、私、美知にはずっと迷惑かけてきて、散々嫌な思いさせたんで、だから、私は何も言う権利はないんですけど。

美知 あの、すみません。わたし、帰ります。わたしいると、ね、たぶん、あれなんです。帰った方がいいですよ。なんで、あとは、ご自由に、直接、交渉してください。すみませんでした。

沙知 わたしが来たのは……

美知 は？何？

沙知 わたしが来たのは、あと少ししか生きられないってなつて、まず、あんたのことが、心残りというか。あんたがそうであるように、わたしも、あんたのこと本当に嫌いで。でも、そう、結婚するの知つて、普通の姉妹だったら、うわーおめでどう！って言えるんでしょうけどね、まあ、言えなくて、それが、なんていうんでしょう、心残り。だから、確かに、なりふり構わずとりあえず来たけど、でもたぶん、普通の姉妹みたいに、結婚おめでどう、つて、言いに来たんだと思うんですよ。

美知 ……はあ？

大志 いやいや。

美知 え？

大志 わかったじゃん、理由。

美知 いや、これ、たぶん、冗談ですよ。外面だけはいいんですって。

隼人 決めた！コラム書いてもらう。

沙知 ……

隼人 「余命宣告を受けて、大嫌いな妹に、結婚おめでとうを言いに行

く姉」。

沙知 ドラマチック！

隼人 できた、できたな、な？

明香 悪くはないんじゃない。

美知 え、え？いや、嘘ですって絶対。

隼人 ごめん、とりあえず、ちよっと待ってもらっていい？その感じ。

美知 えー、いや、嘘ですって！

○2・4 電車のホーム。

夕方、雨。

電車のホーム。夕方の帰宅ラッシュ。

知輝と渡辺がギュウギュウの電車の中で立っている。

駅で止まったまま、なかなか発車しない電車。

知輝　なんでこの電車、発車しないんですかね？
渡辺　なんか、あつたのかね？

誰かの傘が、知輝にあたる。

知輝　つめたっ。

渡辺　え？

知輝　(舌打ち)

渡辺　あ、すみません。

知輝　……え、なんで謝るんですか？

渡辺　え？

知輝　え、だってそっちが。

渡辺　いやいや。あ、すみません。ちよつと。

知輝　あーもーなんなんでしょうね、この仕打ち。拷問みたいですね。事故とかかなあ。

知輝　ていうか、こんだけ人くるってわかってんならなんかやり方あるでしょ。事故でも。

渡辺　はあ。

知輝　ですよね？

渡辺　なんか、疲れてる？

知輝　え？

渡辺　なんか、疲れたね。

知輝　ああ。

傘で貧乏ゆすりが始まる知輝。

渡辺 お姉ちゃんそっくり。
知輝 え……。
渡辺 うん。
知輝 なんか、嫌ですね、それ。
渡辺 そう？
知輝 はい。
渡辺 兄弟って、なんかそんなだよね。
知輝 やめてください。
渡辺 はっはっは。あれ、2番目の。
知輝 ああ、美知。
渡辺 美知さんは？
知輝 んー、全然真逆です。
渡辺 あ、そうなんだ。
知輝 たぶん、沙知姉の嫌なところ見て育ったから。
渡辺 嫌なところって。
知輝 いや、でも、そんな感じですよ。だから、さっさと家出たというか。
渡辺 ふーん。
知輝 はい。
渡辺 ……にしても、全然発車しないね。
知輝 あ、なんか放送鳴ってます。お客様対応？
渡辺 え、なんだろう？
知輝 はあ。え、その人対応して、俺たちは？
渡辺 いやいや。
知輝 あれですよ。車椅子のせるとか、そういうのですよね？
渡辺 でも、それで、こんなに止まるかな？
知輝 ん？
渡辺 え？
知輝 なんか、怒鳴り声聞こえませんか？
渡辺 あ。

ちよつとだけ、ホームに降りて見てみる知輝。

知輝 うわ、あ、喧嘩っばいです。

渡辺 あ、それで。

知輝 え？あいつらのせいで、これだけ人待ってるの。

渡辺 そうだね。

知輝 ちよつと、すぐくないですか？二人ですよ、二人。で、この電車全員。マジで、二人で全車両回って土下座してほしい。

渡辺 ちよつと、見に行く？

知輝 え？なんでですか？

渡辺 いや、なんでってこともないけど。

知輝 行かなくていいんじゃないですか？

渡辺 ちよつと興味ない？

知輝 いや、ないですけど。

渡辺 そう？人の喧嘩ってなんか見ちゃわない？

知輝 いやー。

渡辺 行かない？

知輝 普通に、やめましょうよ。

渡辺 なんか、ちよつとワクワクしない。

知輝 は？

渡辺 ボクシングの試合とか、見るじゃん？

知輝 はい。

渡辺 同じじゃない？

知輝 いや、違います。

渡辺 あ、じゃ、ちよつと見に行ってくるわ。

知輝 行く必要があります？

発車のベル。

知輝 あ、出発します。

ギユウギユウの中、電車に乗り込む二人。

○2・5 美知のアパート

同日、夜、雨。

美知のアパート。

沙知がパソコンでコラムを書いている。

貧乏ゆすり。

美知が帰ってくる。

沙知 おかえり。

美知 ……

一瞬、沙知を見るが、誰もいないかのように振る舞う。

沙知

ねえ表通りにさ、小さなカフェあるじゃん。私全然気づかなくて。調べたらスコーンが有名なんだって。超かわいいの。今度行ってみる？

話の途中で別の部屋にいなくなる美知。

沙知

じゃあ買ってきて来てあげようか？そうね。買ってくる。

沙知は作業に戻る。

貧乏ゆすりがまた始まる。

美知が再び入ってくる。

沙知の手元に結婚情報誌があるのを見つけ、

沙知になるべく近づかないように、

結婚情報誌を取り戻す美知。

出て行こうとするが、沙知の貧乏ゆすりが気になる。喋りたくないが、思わず、言わずにはいられない。

美知 ……だる。

沙知 ……え？

美知 貧乏ゆすり。

沙知 え？なに？

美知 うぎ。

ごめん、今日中にこれ書きちゃわなきゃいけないくて。ごめんね。

美知 (話の途中で) 気持ちわる。

話の途中でさっと出て行く美知。

作業を再開する沙知。

また美知が戻ってくる。

話したくないけど、言いたいことが山ほどあるのが耐えられないように。

沙知の貧乏ゆすりは続いている。

美知も貧乏ゆすりを始める。

美知 私の部屋なんだけど……

加速する、美知の貧乏ゆすり。

ピタッと、沙知の動きが止まる。

美知をじっと見る沙知。

沙知 あのさ、バタフライエフェクトって知ってる？

美知 ……

沙知 蝶々の羽ばたく風が、海越えて嵐になるやつ。

美知 ……

沙知 たとえば、あなたのその震えで、戦争が起こっちゃうみたいなことだよ？

美知 ……

沙知 そうでしょ。はい。終わり。

美知 そっちゃん。そっちゃんからじゃん。

沙知 そうだよ。だから、あなたが広めてるってことになるね。

美知 根元あんたじゃん。

沙知 だから、元はわたしでも。
美知 なにその理論。
沙知 あなたが黙ってれば戦争は起こらないってことかな。
美知 あんたがいなくてもだよね！

沙知、聞こえなかったかのように作業を続ける。
美知、たまらず。

美知 あのを、コラム、一回目のやつ、読んだけど。

沙知 ……

美知 早く言えば？

沙知 ……

美知 結婚おめでとうって言うのが、ゴールなんでしょ。じゃあ言っ
て早く帰ってよ。

沙知 ……

美知 いや、マジで。

沙知 ……なんかね、もしかしたら、本出すかも。

美知 は？

沙知 隼人さんが動いてくれてるらしいのね。

美知 え、ごめん、何が目的なの？

沙知は美知を一度じっと見る。
再び貧乏ゆすり作業に戻る。

美知 全然わかんない。

沙知 ……

美知 じゃあ、そしたら、いつ死ぬのかなあ？

沙知 ……

美知 余命教えてくれないかなあ、余命。そこまですたら我慢できる
かもしれないのになあ。

沙知 ちよつと静かにしてもらっていい？ごめんね、次のやつ、締め切
りなの。

美知 わたしの生活が脅かされ続けてるの！

不意に、ポカーンとする沙知。

沙知 ……なんかした？わたし。

美知 え？

沙知 何か危害加えた？

美知 ……

沙知 よく喋るね。

美知 え、何言ってるの？

沙知 昔は逆だったのにね。わたしが喚いて、美知はじっと黙ってたの
にね。

美知 え、何が言いたいなの？

沙知 別に。ただ、何怖がってるんだろうって思って。わたしが怖い理由が
何かあるの？まあ、あるだろうね。

美知 ……ないし、別に。

沙知 ふーん。じゃあ、いいんじゃない？

再び作業に戻る沙知。

舌打ちして、再び貧乏ゆすりを始める美知。

大志が帰ってくる。

大志 ただいまあ。

沙知 おかえり。

美知 おかえり。

大志は美知の貧乏ゆすりが気になる。

大志 美知、貧乏ゆすり。

美知 え、なに？

大志 やめなつて。

美知 じゃあ、そっちから先に言つてよ。

いつのまにか、静かにしてる沙知。

大志 え、なにが？

美知 えー！ずるー！えー！

大志 とにかく、なんかよくないからそれ。

美知 いや、これわたし発信じゃなくて！

クスツと思わず笑う沙知。

沙知

……ちよつと、わたし、締め切り間に合わないから、向こうで作業するわ。

出て行く沙知。

大志 ……美知で、笑ってたね。

美知 一応、人間なんだ、あの人。

大志 いや、言い方。

美知 あ、まあ。

大志 つていうか、今日早くない？帰ってくるの。

美知 だって、弟と、ほら、くるから。

大志 あ、そっか。あれ、まだこないの？

美知 なんか電車遅れてるみたい。

大志 駅まで迎えに行つた方がいいかな？

美知 大丈夫でしょ、子供じゃあるまいし。

大志 いやー、3兄弟揃うのかあ。

美知 すっごい意地悪な目してる。

大志 そんなことないよ。楽しみだなあつて。

美知 ねえ、読んだ？あの子のコラム。

大志 あ、読んだ読んだ。

美知 どうなの？

大志 なんか、結構な閲覧数稼いでるらしいよ。

美知 あれが？なんか、作り話みたいじゃない？

大志 え、全然そんなことないよ。いや本人たち見てるからこそさ、姉

妹の仲直りのためにがんばろって思ったよ、俺。

美知 あ、そう。

大志 え、ダメ？

美知 ダメじゃないけど、軽い感じしない？その感じ。

大志 美知さ、もっと、いろんなこと、素直に受け止めた方がいいんじゃない？

美知 は？

大志 何かで読んだんだけど、マレーシアにセマイ族ってのがいてね。

美知 はあ。

その民族は戦うとか憎むとかそういうことを知らないんだって。

大志 大志の好きそうな話じゃん。

大志 でね、一日の大半を、その日見た夢の話してるんだって。みんなで夢の話分かち合う。なんかよくない？

美知 で？

大志 だから、沙知さんとき、夢の話しよう。どう？

美知 私、夢とか見ない。

大志 じゃあ、夢の話じゃなくてもいいからさ、どうでもいい話でも、したらいいと思うんだけど。

美知 なんて？

大志 なんてって。

美知 想像つく？私と沙知がどうでもいい話してるの？
つくよ。

美知 嘘でしょ。

大志 とりあえず、毎日どっか寄って夜中に帰ってくるのやめてさ、ちやんと帰ってきなよ。お姉ちゃんにさ、向き合おうよ。

美知 ……無理だよ。

大志 ……そうかなあ。

美知 昨日さ、映画見に行ったんだけど。

大志 うん。

美知 美男美女の余命モノでさ。

大志 なんでまたそんな映画を今。

美知 いや、わたし、ああいう映画好きなのはさ、さすがに、全然泣けなかったわ。は？あほくさって。

大志 ……美知さ、精神科とか心理カウンセラー、試しに行ってみる？
美知 それ本気で رفتてるの？

大志 友達が行っててさ、初めはやっぱり抵抗あったらしいけど。

美知 結婚したら、治るかも。

大志 は？

美知 ねえ、式場の日取りとか、下見とか、全部頓挫してるじゃん。

大志 だってそれどころじゃないし。

美知 でも、考えようによつては、沙知が死ぬ前に、結婚式あげた方が

いいんじゃないの？

大志 それも、そうだね。

インターホン。

大志 あ、来たかな。

沙知が出てくる。大志、玄関へ。

苛立ちを隠せない美知。

大志の声 あ、初めましてー。

知輝の声 どうも。おじゃまします。

大志と知輝、そして渡辺が入ってくる。

大志 あの、弟さんは二人いたのね？

美知 いや。

大志 え？

美知 ごめん、言ってなかったんだけど。

渡辺 あ、すみません、申し遅れました。渡辺自由と申しまして。

美知 沙知の彼氏なんだって。

渡辺 あ、まあ、はい。ちょっと、いてもたってもいられなくなって、

美知さんにもお願いして。

沙知 ……なんで……

渡辺 みなさん、本当に、ご迷惑おかけして、すみませんでした。

美知 渡辺さんが謝るのは、全然違うというか。むしろ、ねえ。
知輝 うん。

沙知 ……

渡辺 沙知、お父さんとお母さん心配してる。帰るよ。

沙知 ……無理。

渡辺 はあ……もう、ほんとすみません。

大志 なんか、あの、ふふっ。

美知 え？

大志 いや、ちょっと安心したというか。

美知 でしょ。

渡辺 いやいや、そんな大した男じゃないですけど。逃げられたわけ

すし。

大志 いやいや。

渡辺 とりあえず、連れて帰りますんで。

沙知 無理。

渡辺 ほら、行くよ。

沙知 無理だって。

渡辺 めちゃくちゃ迷惑かけてるから。

沙知 嫌だ。

渡辺 ほら。

沙知 だから嫌だって。

渡辺が沙知の顔を叩く。

渡辺 お前、どれだけ周りが心配してると思ってるんだよ。

沙知 ……

大志 まあまあ、沙知さん、荷物とか、あとでこっちで送るんで、とり

あえず。

渡辺 すいません、ご迷惑かけちゃって。ほら。

沙知 行きたくない。

沙知の顔を叩く渡辺。

大志 ああ。
渡辺 ごめんなさいね、つい。
大志 いや、でも、あんまり、ね、そういうことするのは。
渡辺 まあ、でも、こいつの場合、言ってもわかんないんで、しょうがないところもあるんですよね。

と言いながらもう一発叩く。

美知 え。

大志 いやいや。

渡辺 え？

大志 いや、よくないですって。

渡辺 あ、おっしゃってること、わかるんですけど、でも、わかってないんで、こいつ。やっぱわからせなきゃいけないんですよ。

渡辺が沙知を突き飛ばす。

騒然。

沙知の悲鳴。

逃げ惑う沙知を追いかけ回す渡辺。

沙知は「やばいやばい」と言いながら逃げる。

立ち尽くす美知。腰が抜ける知輝。

大志 やめてくださいって！

渡辺 すみません、すぐ連れて帰るんで。

沙知 嫌だ、行きたくない！

渡辺 お前いい加減にしろよ！

大志が渡辺を抑えようとするが突き飛ばされる。

とうとう捕まる沙知。

馬乗りになって殴り始める渡辺。

渡辺 お前、俺が貸した金どうすんの？筋通さないとね。帰って働くよ。

沙知
嫌だ！

大志が渡辺をなんとか剥がす。

大志
やめろって！

その隙に、沙知は美知と大志の後ろに逃げる。
過呼吸になる沙知。

渡辺
ごめんなさい、連れて帰るんで、いいですか？

大志
いや、ダメでしょ。

渡辺
あの、僕の彼女なんで、僕がどうにかするんで。

大志
警察呼びますよ。

渡辺
えーと、すみません、内輪の話なんですよね、これ。

美知
こっちの方が、内輪だと思うんですけど。

渡辺
そうですね。

美知
一応、血つながってるんで。

渡辺
妹さん、美知さん、あなたもさ、苦しめられてるわけでしょ、こ

いつに。一発殴って見たら？

美知
は？

渡辺
すつとするよ。いいよ。なんか。苦しむ顔がさ、いいじゃん。こ
いつもさ、好きでやっているとこあるから。な？うちら、付き合っ
てるから、すみませんね、ちよつと行き過ぎたノリに見えるかも
しれないけど、いつもこうなんですよ。

美知
……

大志
帰ってもらえます？

渡辺
いや、だから。

大志
本当に警察呼びますからね。

大志は携帯電話を手にとって準備する。

渡辺
すみませんね、お騒がせしちゃって。

大志
帰ってください。

渡辺 ……じゃあ、沙知、外で待ってるから。

渡辺出て行く。

大志 追っ払ってくる。

美知 大志、無理しないで。

大志 大丈夫。

大志、出て行く。

過呼吸が続いている沙知。

知輝 やばくない？

沙知 ……バック……バックに……薬……と水……

知輝 バックどこ？

美知 え？

知輝 沙知姉のバック！

美知 あ。

隣の部屋からバックを持つてくる美知。

薬とパットボトルの水を出す。

飲む沙知。少し落ち着く。

美知 なに、この、状況……

知輝 わかんない……

沙知 ……あれ、彼氏。

美知 ……あ、そう。

沙知 ちよっとお金借りてて、仕事も紹介してくれるし、普段はいい人
なんだけどねえ。

知輝 いやいや……

沙知 ほんとほんと。だって、だから連れてきたんでしょ、ここまで。

知輝 まあ、そう。

沙知 でしょ。わたし、あの人がいないと、とりあえず生きてけなくなっ
てたんだよねえ。

美知 そう。
知輝 美知。
美知 ん？
知輝 とりあえず、結婚おめでとう。
美知 あ、うん、ただけど、ありがとう。
知輝 でも、家帰ってきてよ。
美知 は？
知輝 もう、限界かも。
美知 いや、え？
知輝 俺、家、出たい。
美知 出ればいいじゃん。
知輝 ……言うと思った。
美知 え、なに？
知輝 別に。

大志が帰ってくる。

大志 追い返した。
美知 大丈夫？
大志 うん。沙知さん大丈夫？
美知 あ。
大志 ちよつと、冷やしたりしなきゃじゃない。
知輝 そうですね。
大志 あ、氷あるかな。
美知 ないかも、作ってない。
大志 あー。
美知 わたし、買ってくるわ。
大志 いいよ、俺行くよ。
美知 ごめん、ちよつと外出たいから。
大志 でも、危なくない？まだいるかもしれないし。
知輝 あ、じゃあ、僕も行きます。
美知 うん。
大志 じゃあ、ごめん、お願いしていい？

知輝
はい。

美知と知輝、出て行く。

大志
大丈夫ですか？

沙知
……ごめんね。

大志
いやいや。

沙知
わたし、消えた方がいいよね。

大志
そんなことないですって。

沙知
もう、消えて無くなりたくない。

大志
ありますって、いる場所ありますよ、とりあえず、ここに。

沙知
やめてよ。

大志
大丈夫です。ここいて大丈夫です。

沙知
なんでそんなに。

大志
え？

沙知
いや。

大志
はい。

沙知の瞳が大志を捉える。

沙知
……わたし、本当に死ぬのかな。

大志
バカですよ。そんなの。

沙知
そうかな。

大志
ああ、もう。

大志が沙知を抱きしめる。

沙知
え。

大志
大丈夫です。居場所あります。

沙知
だめ。泣く。

大志
今日ぐらい、いいんじゃないですか？

沙知の手も、大志をぎゅっと抱く。

しばらく抱いているが、あ、これもし今何かの間違えで
帰ってきたらこの状況やバイかも、と現実に戻り、離れ
ようとする大志。
が、離さない沙知。

沙知 嫌だ、もうちよつと。

大志 あ、でも。

沙知 離れたら多分、消えてなくなりそう。

大志 そうですよね。

沙知 うん。

大志 ……これ、どうしましょう？

沙知 どうしようね。

大志 ……あの。

沙知 うん。

大志 ……駅まで、往復で、20分ぐらい、かかりますよね？

沙知 ……かかると思う。

大志が沙知を押し倒す。

【3幕】

○3・1 柳瀬家

夕方。

幸子が洗濯物をたたんでいる。

道夫が別の部屋で探し物をしている。

道夫 ない。あれ？なんでないんだ。

幸子 なに？

道夫 お母さんないんだけど。

幸子 なに探してるの。

片方だけしかない靴下の山を持った道夫が出てくる。

道夫 靴下がない。

幸子 え？

道夫 靴下全然揃わない。靴下。

幸子 あーあー

道夫 なんでないんだ。なんで。ない。あれ？

幸子 どこか出かけるの？

道夫 出かけないけど。これとそろわない。なんでだ？なんでないんだ。

幸子 えー。

道夫 ない。あれ。ない。

幸子 これ沙知のじゃない。

道夫 え？

幸子 あるわけないでしょ。これ沙知のだから。

道夫 そうか。沙知が盗んだから。

幸子 いないんだから沙知は盗まないでしょ。

道夫 沙知まだ帰ってこないのか。

幸子 帰ってきてない。

道夫 おかしいなあ。なんでそろわないんだ？

聞く耳持たず、探し続ける道夫。

幸子 違う、これ美知のじゃない？

道夫 美知。

幸子 どこから出してきたの？

道夫 美知が帰ってきてるのか

幸子 もっと帰ってくるわけないでしょ。

道夫 じゃあなんでだ。空き巣？空き巣か？

幸子 お父さんの靴下盗まないでしょ。

道夫 なんでだ。ない。ない。

幸子 もう。だから。

幸子は何か言い返そうとするが諦める。

ヒステリックに靴下を探し続ける道夫。

幸子 お父さん、私ね。

道夫 ん？

幸子 パート、クビになるかも。

道夫 んー。

幸子 腰が悪くてね。できないことも多くなってきたんだけど、いきなり言うこともないじゃんね。

道夫 ……働く。

幸子 え。

道夫 俺が働く。

幸子 無理でしょ。

道夫 働くよ。

幸子 靴下探してるのにな？

道夫 ……

洗濯物をたたみ始める幸子。

その中に、片方しかない靴下を見つける。

幸子

あ。

道夫 ん。
幸子 これじゃない？
道夫 あった。
幸子 うん、あった。
道夫 あった。

嬉しそうに靴下を揃える道夫。

○3・2 兄夫婦のマンション・リビング

美知と明香。

明香 じゃあ、とりあえず病院紹介すればいいってこと？

美知 そうしていただけると。

明香 連れて行ける？

美知 はい……私、それで診てもらって、場合によっては、姉を連れて、しばらく実家帰ろうかなって思ってるんです。

明香 え？

美知 いや、ちよつと実家もごたついてて。一回整理しなきゃなって。

明香 ……どうしたの？なんか急に。

美知 はい？

明香 だって、我関せず、みたいな感じだったのに。

美知 いや。

明香 うん。

美知 なんで、しょうね。やれる人がやるしかないって思い始めたのか
もしれません。

明香 そっか。

美知 はい。

すつと立ちあがり、

ティーセットでお茶を入れ始める明香。

明香 ……ねえ、お姉さんってどんな人なの？

美知 え？

明香 ほら、私、全然知らないから。

美知 小さい時は、どちらかと言えば優等生だった気がします。

明香 そうなんだ。

美知 私、どこ行っても、お姉ちゃんは？お姉ちゃん元気？って言われながら育ったんですよ。だから、私は姉とは違うって思わないとやっつけてなかったというか。

明香 劣等感的な？

美知 はい。多分。割と姉はエリートというか、でも、大学受験失敗して、滑り止めで入った大学にだんだん行かなくなっていて、引きこもりになったと思ったら、ミュージシャンになるっていい出して。そこからはもう、めっちゃくちゃです。

明香 そっか。

美知 はい。

明香 勝ったんだ。

美知 え。

明香 いや、お姉さんとの競争に、勝ったってことだよね。

美知 いやいやいやいや。

明香 でも、そういうことじゃない？

美知 うーん……でも、正直、してやったりというか、安心して自分もいるかもしれないですね。ああ、私が選んだ方は間違ってたんだって。それは、でも、自分の3年後を、姉で仮想体験してたからで。だから、少し、申し訳ない気持ちもあるというか。姉は失敗作なんですよ。だから、なにやってもしょうがないって思えてきたというか。

明香 ……

美知 ちよつと言い過ぎましたかね。

明香 いや。

美知 はい。

美知に紅茶の入ったカップを出す明香。

明香 失敗作だからしょうがないとはならない気がするけど。

美知 はい？

明香 ……不倫してるよ、お姉さん。

美知 え？

明香 ……不倫。

美知 いや、絶対そんなことないです。

明香 え？

美知 ないです。

明香 それがね、あるの。

美知 ないですって。

明香 ごめん、信じたくない気持ちもわかるんだけど。

美知 え、え。

明香 あるの。

美知 え、うそ……あいつ。

明香 ウチの人とね、べったりなの最近。

美知 ……ん？

明香 え？

美知 あ、お義兄さん？

明香 そうだけど。

美知 あ、ああ。

明香 ごめんごめん、大志くんじゃないわよ。

美知 よかったあ。

明香 よくないんだけどね。

美知 あ、すみません。

明香 ……美知さんに言うことじゃないかもしれないけど、どうしてくれんの？って思ってる。

美知 うちの姉が、本当に、すみません。

明香 いや、ごめんごめん、美知さん、急に姉妹の感じ出して来たから、じゃあお宅が生んだ失敗作の責任とってくれるのかな？ってちょっと思っただけ。

美知 あ、本当に、申し訳ありません。

明香 あーだめだ、何言っても棘入っちゃうね。美知さんに言ってもしようがないのね。

美知 いや、その。

明香 あの人、多くて。私もさあ、あの人にとっては失敗作なのよ。

美知 いやいや。

明香 大学からの付き合いだからさ、その頃は貧乏というか、しゃかりきにやっつて。私、今もそうだけど、いいんじゃない？っていう係なのね。

美知 はあ。

明香 その頃は多分、素直に、いいものいいんじゃない？って言ったと思うけど、だから、よくないことはよくないって言えたけど

美知 ……
明香 まあ、あの人も多くて、私もそれで、見て見ぬふりとかしてるんだけど…まさかねえ…
美知 ……
明香 失敗作って見られてるなって、すぐわかるから。
美知 ……
明香 失敗作だから、なにやってもしょうがないって、ある意味許されるなら、もしかしたら、私、お姉さんのこと刺しちゃうかもよ。
美知 ……え？
明香 わかんないけどね。
美知 いやいや。
明香 冗談だと思ってるでしょ。
美知 え、あ。
明香 冗談よ。
美知 ……はい。
明香 私、ウチの人に病院紹介してって言った方がいい？あと、お金だけ。
美知 あ。その。
明香 ね。
美知 はい。
明香 ウチの人に言ったら、喜んで動くと思うけど。
美知 あの、すみません。
明香 どうしよっか。
美知 ……姉に、話します、お義兄さんのこと。
明香 そうしてくれると助かるけど。
美知 はい、そうします。
明香 なんかごめんね。
美知 いや、こっちが、本当にすみません。
明香 ……姉妹とか兄弟って、なんか、変だよね。
美知 え。
明香 いや、血しか繋がってないのに。
美知 はい。

○3・3 オフィス

隼人のオフィス。社長室。

隼人が沙知の書いたコラムを読んでいる。

沙知が隼人をじっと見ている。

隼人 『私は妹と、血でしか繋がっていない。でも、気にせずにはいられないのは、妹に血以上の、私自身を見てしまうからかもしれない。妹の幸せは私の幸せ。私の生きられない人生を、妹に託したいと思う。』

……

沙知 ……いい文章だね。

隼人 ほんと？

沙知 ありがとう。全4回、おつかれさま。

隼人 うん。今日、私、お寿司食べたいかも。

沙知 ……そっか。じゃあまた。お疲れ様でした。

隼人 ……え？

沙知 あ、もう、これで終わったから、帰っていいですよ。

隼人 あれ、今日は？

沙知 あ、この後、ちよつと会議があつて。

隼人 え？

沙知 うん。じゃあ、お疲れ様でした。

隼人 ……え、帰るけど。

沙知 うん、だから帰って大丈夫。

隼人 ちよつと待って。なんかあった？

沙知 ん？

隼人 あ、私、下で待ってればいいってこと？

沙知 いや、帰っていいってこと。

隼人 あー、そういう。

沙知 はい、お疲れ様。じゃあね。

隼人 ……もう、じゃあ、いいのね？

沙知 ……あ、あと、そういえば、本のことなんだけど。

隼人 え。

隼人 ちよつと、予算的なこととか、うまく都合つかなくて、今回は厳しいっていうか。

沙知 あー。

隼人 うん、ごめんね。

沙知 バレたんだ。

隼人 ……

沙知 奥さんに。

隼人 あのさ、君も、悪いんじゃないかな。僕に隠してたじゃん。

沙知 なにを？

隼人 いや、そういう仕事してるって。

沙知 え。

隼人 印象がさ、悪いんだよね。弟のこともあるし。

沙知 そんなの、愛人な時点で印象どうこうじゃなくない？

隼人 印象どうこうだよ！こっちは印象どうこうで生きてんだよ。

沙知 ごめんごめん！

隼人 離せって！はい。これで終わり！帰って。帰れって！

沙知 え、私、何でもする。何でもするから。

隼人 ごめん、とりあえず今日は帰って。

沙知 じゃあ、記事は？記事書く。第2段も考えてるの。ね。これから、妹の結婚式とか。結構センサーショナルだと思うの。でしょ？今回稼いだわけでしょ。絶対次も当たるから。

隼人 最終的に、伸びなかったから。

沙知 え？

隼人 いや、1回目は行ったんだけど、そこから伸び悩んだというか、むしろ回追うごとに下がってるの。

沙知 ……

隼人 内容がさ、タイトルには勝てなかったんだよね。

沙知 え、じゃあ、私、使い捨てってこと？

隼人 そういうことじゃなくてさ、ま、今後とも、未永く。でも、今回はこれで、一旦って感じで。

沙知 それ、もうないやつじゃん。

隼人 ネガティブに考えすぎだよ。

沙知 とりあえずこいつ死ぬまで我慢すればいいやつって思ってるでしょ。

隼人 いや、そんなことないって。とにかく今日は帰ろ。帰ろうよ。
沙知 嫌だ！嫌だ！嫌だ！
隼人 ちよつと、あんまり大きい声出すと。

ドアの外に向かって喚き散らす沙知。

沙知 嫌だ！嫌だ！嫌だ！
隼人 わかった、わかったから！

なんとか沙知を落ち着かせる隼人。
沙知が隼人に抱きつく。

沙知 お寿司食べに行く？
隼人 ……
沙知 行く？
隼人 ……
沙知 行く？
隼人 行く！

○3・4 柳瀬家

道夫と渡辺の笑い声。

道夫 お母さん、今日は渡辺くんきてるから、お寿司でも取ろう。
幸子 はいはい、そうしましょうか。
渡辺 いやいや、いいですって。申し訳ないんで。
幸子 またそうやって遠慮して。
道夫 そうだよ。渡辺くん、今日は一生懸命やってくれたんだから。
幸子 そうよ、ご褒美。
渡辺 えーいいんですか？

知輝が帰ってくる。

知輝 ただいまー。
道夫 お、知輝、遅いぞ。
幸子 そうよ、渡辺くん来てるんだから。
知輝 え？
渡辺 おう、おかえり。
知輝 え、何で？
道夫 何でって、垣根刈るのやってくれて。
幸子 そうよ、今日やるって言ってるのに知輝どっか行っちゃうから。
知輝 いやいや違って、その、何でこの人いるの？
道夫 知輝！失礼だぞ。
知輝 いや、怖い怖い。だって、この人、沙知姉を。
幸子 沙知がね、帰ってくるまで、大変だろうからいろいろ家のこと手
渡辺 伝ってくれるって言ってくれてね。
渡辺 沙知が帰ってくるまで……
知輝 は？
渡辺 あ、じゃあ、そろそろ僕、帰ります。
道夫 え、お寿司は？
幸子 そうよ、食べて帰ってよ。
渡辺 ちよっとこの後用事があった。

幸子　　そう？
渡辺　　このこと、考えといてくださいね。

机の上には資料。

道夫　　うん、ありがと。
渡辺　　じゃあ、また来ます。
知輝　　ちよっと待って、このことって何？
道夫　　いやー、このことはこのことだよ。
知輝　　は？
幸子　　渡辺くんがね、いい保険紹介してくれて。
道夫　　え、何？
知輝　　保険だよ。
幸子　　お父さんの失業保険ね、持ち越されるの。
道夫　　渡辺くんのお陰で老後は安泰だから。お前もウチ出ていいぞ。
渡辺　　じゃ、また来ます。
幸子　　はーい。
知輝　　待って、何？
道夫　　うるさいな。
知輝　　え？持ち越し？
幸子　　ね？渡辺くん、そうだよね？ちよっと最初に払ったら持ち越しされるのよね。
渡辺　　はい。
知輝　　そんなのあるわけないじゃん。
幸子　　ちよっと知輝。失礼でしょ。
知輝　　え、バカじゃないの。騙されてるって。
道夫　　いい加減にしろ！
知輝　　おい、お前、何話した？
道夫　　知輝！
知輝　　僕は、その、資産運用をね、もっと上手にやればいいのになって
道夫　　いう提案をただけで。
知輝　　はあ？
道夫　　どうせお前でてくんだから関係ないだろ。

知輝
渡辺

……
じゃあ、また来ますんで。失礼します。

渡辺去る。

知輝

ちよつと貸して。

知輝が資料を見る。

知輝

明らかに詐欺だよ。

幸子

知輝やめて。

道夫

あいつ、沙知姉殴りまくった。
ん？

知輝

ウチらの目の前で、沙知姉をボコボコにし始めた。

幸子

嘘よ。

知輝

ほんとだつて。

幸子

……でも、それぐらいやらないと、沙知は抑えられないのかもね。

知輝

私だつて、そうしたい時、何度もあるもん。

道夫

……俺、ここ、残るよ。

知輝

いや、お前は、やりたいことやれ。

幸子

俺、残っちゃダメ？ウチに。

知輝

だつて、いいの？それで。

知輝

だから、父さんも、母さんも、お願いだから、俺の言うこと信じてよ。

○3・5 美知のアパート

美知と大志。

美知 ね、お願い、信じてよ。

大志 いや、ほんとかなあ。

美知 お義姉さんが言ってるんだから。

大志 うーん。

美知 それとなく、聞いて。お義兄さんと、そういう関係なのか。

大志 俺が？

美知 だって私が聞いても絶対言わないじゃん。

大志 えー。

美知 お願い。

沙知が帰ってくる。

沙知の声 ただいまー。

美知 え、やばい。

美知がクローゼットに隠れる。

大志 え、何で隠れるの？

美知 わかんないけど、なんとなく！

大志 え、え。

沙知が入ってくる。

沙知 ただいま。

大志 うん、おかえり。

沙知 美知は？

大志 まだ。

沙知 そう。

大志 ご飯、食べた？

沙知 うん。
大志 そっか。って言うか飲んできた？
沙知 うん。飲んできた！なんで？
大志 いや、なんか、機嫌いいから。
沙知 ねえ、また、コラムの連載決まった。
大志 おー、よかったじゃん。
沙知 私、文才あるみたい。
大志 面白かったよ。こないだの。
沙知 でしょ。最終回もっと面白いから。
大志 うん、楽しみ。
沙知 私さ、やっと居場所見つけた。
大志 ん？
沙知 なんか、今、楽しくてしょうがない。
大志 それは、良かったね。
沙知 ……なんか今日、素っ気なくない？
大志 え、そんなことないよ。
沙知 なんか変。
大志 別に普通だって。
沙知 ……うわっ、酔っ払いめんどくさいって思ってたんだろ。
大志 思ってる。
沙知 えーさみしいー。
大志 ちよつとちよつと。
沙知 お仕置き。

沙知が大志の鼻の穴を指で塞ぐ。

大志 ごめん、やめて。
沙知 お仕置きなのだ。
大志 やめてやめて。
沙知 する？
大志 え？
沙知 しよっか。
大志 いや、え、何のこと？

沙知 うわー、かわいいー。
大志 とりあえず、はなれよつか。
沙知 焦らされるの好きー。
大志 そういうことじゃなくて。
沙知 いつもの感じ飽きた？
大志 いつもの？え？いつものって？
沙知 あ、初めて感出したってこと？
大志 ん？
沙知 マンネリ化してるのが嫌なんだ。

沙知が大志との初めての日を再現。

沙知 「……わたし、本当に死ぬのかな」

ギャハハハと笑う沙知。

大志 ごめん、勘弁して。
沙知 えーどうしたの？
大志 あのー。
沙知 え、わたしのこと、嫌いになった？
大志 いやいやいや。
沙知 じゃあいいじゃん。
大志 だめだって。
沙知 そしたら手繋ぐだけ。
大志 それは、え、それは、大丈夫なのか？

そのまま大志に身をまかせる沙知。

沙知 あったかい。
大志 あのさ、兄貴のことなんだけど。
沙知 生きてて良かったー。
大志 ……うん。
沙知 うん。

大志 あのさ、どうして、ウチに来たの？
沙知 え？
大志 いや、単純に今、気になって。
沙知 ……ほんとのこと言うかね。
大志 うん。
沙知 美知が許せなかったのかも。美知の周りめちやくちやにしてやろ
うと思つてたかもね、私。でも今はね……

クローゼットが開く。

沙知 ……え。
美知 ……
大志 ごめん……ちがう。
美知 ……
大志 でも今は、何？でも今はって言ったよ。でも今はなに？
沙知 ……
美知 ……まず、これは？ これは、何？
大志 あの、でも今はって。
沙知 わたしの勝ち。……だよな？
美知 ……
沙知 これでなんの迷いもなく、晴れ晴れした気持ちで地獄に行けるわ。

出て行く美知。

【4幕】

○4・1 柳瀬家

夜。

道夫、幸子、知輝が夕食中。
家族の食卓。

そこに美知がくる。

美知 ただいま。

知輝 え。

幸子 美知？

美知 うん。

幸子 美知なの？

美知 だからそう。

道夫 おかえり。

美知 うん。

知輝 急に、どうしたの？

美知 わたしの分の、ご飯ある？

幸子 えー、ないわよ。どうしよ。

美知 じゃあ、大丈夫。

幸子 なんか、あるかな。

美知 大丈夫だって。

知輝 沙知姉は？

美知 ……

道夫 元気にやってるか、沙知は？

美知 元気。元気すぎる。

道夫 そうか。じゃあ良かった。

美知 よくない。

幸子 お腹減ってるからだ。なんか作ろうね。

美知 沙知をどうしてこっちによこしたままなの？

幸子 あんた、よこしたって。

美知 もう、やりたい放題なんだけど。

道夫 そうか、沙知も、好きなことやってるのか。
美知 早く、この檻に戻した方がいい。
知輝 ……またそれ言いに来たの？
美知 わたしも一緒に帰ってくるから。
知輝 は？
幸子 あ、そうなの？
美知 沙知、連れて帰ってくる。
道夫 そうか。
美知 わたし、責任とるわ。あの怪物産んじやった責任。わたし、しばらくこつちで暮らす。

なんとなく、食事が再開する。
が、知輝が手を止める。

知輝 ……あのさ。
美知 ん？
知輝 出てけよ。
美知 は？
知輝 そもそも、お前のせいじゃん。
美知 え、何？
知輝 お前が、知らん顔して出てったからじゃん。
美知 知らん顔はしてない。
知輝 父さんが病気で大変な時、逃げた。
美知 ……
知輝 何も言わず出でたくせに。
美知 言った。ちゃんと断った。
知輝 断ったことになるわけないじゃん。
幸子 知輝、いいから。
知輝 だめだよ。だつてこいつ、誰もいない時間に帰って来て、うつ病の父さんにだけ話して、それ以来、ほとんど今まで帰ってこなかったわけですよ。
美知 昔のことじゃん。今それどころじゃなくて。あいつが。
知輝 沙知姉がさ、どれだけウチのためにやって来たか知ってるの？

美知 ……
知輝 沙知姉殺すのは、お前だよ。
美知 は？
知輝 今まで自分だけ好き勝手やって来て、今更家族ぶるんじゃねえよ。
美知 え、なんでそんなこと言われなきゃいけないの。
幸子 沙知を、よろしくね。
美知 ねえ、お父さん。
道夫 ん？
美知 ねえ、お父さん。
知輝 泣いたって、だめだよ。
美知 お父さん。
道夫 美知。
美知 ん。
道夫 まず、結婚おめでとう。
美知 うん。
道夫 幸せにな。
美知 え。
道夫 お父さんは、美知を、応援してる。
美知 うん。
道夫 それから、沙知を、最後まで、よろしくな。
美知 ……はあ？
知輝 帰れよ。
美知 ……
知輝 帰れって！

○4・2 兄夫婦のマンション

リビングに隼人と大志と明香。
ワインを持っている明香。

明香 これ、開けちゃう？せっかく大志くんきてるし。

隼人 開けちゃうか。

大志 結構高いやつなんじゃないの？

隼人 いいよいいよ。結婚祝いで。

明香 そうね。

大志 うん。

明香がグラスを取りに行く。

隼人 どうした、急に？

大志 いや、その。

隼人 うん。

大志 兄ちゃんさ……

明香の声 ねえワインだけでいいの？

隼人 いいよいいよ、とりあえず。

明香が入ってくる。

ワインとグラスを持ってくる。

隼人 で？

大志 ん？

隼人 いや、何か、話そうとしてたから。

大志 ああ。

明香 なに？沙知さんのこと？

大志 ……まあ。そうです。

隼人 ああ、ごめんなあ。本、出すって言ったのに。

明香 そっっちゃないでしょ。

隼人 え？……

明香 病院のことじゃない？ね？
大志 ああ。
隼人 そうか。
大志 病院の。
隼人 そうかそうか。
大志 まあ、はい。
隼人 うん。
大志 いや、その、それも含めて、どうしようかなって。これから。
明香 いつまでも3人暮らしてっていうのもね。
隼人 そうだよな。
大志 うん。
明香 そうよね。
大志 あの、兄ちゃんはさ……沙知さんのこと、どう思う？
隼人 は？
大志 いや。
隼人 え、どうって？
大志 あ。
隼人 いや、それは、そうだね、辛いよね。
大志 うん。
明香 え、沙知さん何かあったの？
大志 は？
明香 いや、何かあったのかなあって。
大志 え？その。
隼人 何か、みんながさ、明るくなれるような方法をさ、考えなきゃいけないよな。
大志 ……
隼人 え？
大志 そんなの、あるのかな？
隼人 ん？
大志 いや、そんなの……
隼人 知恵を絞ろう。な。みんなで考えよう。

ワインを注ぐ明香。

○4・3 河原

河原をじつと見る渡辺。

そこに、絶望で頭がクラクラとしている美知がくる。

渡辺 どうも。

美知 ……

渡辺 どうしました？

美知 は？

渡辺 目が、すごいですよ。

美知 なんですか？

渡辺 いやいやすみません。沙知は、元気ですか？

美知 みんなそれ。

渡辺 こないだは、取り乱してしまつて、すみません。

美知 別に、もう、いいです。

渡辺 そうですか。

河の流れに気づく美知。

美知 私、ここで突き落とされた。

渡辺 はい？

美知 沙知に。

渡辺 え？

美知 いや、なんでもないです。

渡辺 僕ね、どうにかして、沙知に帰つて来て欲しいんです。

美知 あんなこととして、よくそんなこと言えますね。

渡辺 愛情表現ですから。

美知 へえ。

渡辺 はい。

美知 ……殺したい。

渡辺 はい？

美知 ……沙知を殺したい。

渡辺 奇遇ですね。僕もです。

美知
渡辺

は？

僕ね、沙知を、殺して、食べちゃいたいです。

美知、吐きそうになる。

渡辺

支配、したいんです。わかりますよね？この感じ。

美知

……わかんない。

渡辺

そうですか。

美知

……でも。

渡辺

はい。

美知

でも、殺したいのは、一緒。

渡辺

そうですね。

美知

本当に？

渡辺

ゾクゾクしません？

美知

は？

渡辺

考えただけで。

美知

……

渡辺

病気なんかには殺させたら、もったいない。悔しい。

美知

……

渡辺

それは、わかります？

美知

それは、わかる。

渡辺

じゃあ。

美知

うん。

【終幕】

美知のアパート。

夕方。

大志が衰弱しきっている。

沙知が隣にいてパソコンに向かっている。

沙知 書けた！書けた。クライマックスまで、書けた。ねえ書けたよ。
大志 んー。

沙知 ねえ、読む？読んでよ。

大志 え。

沙知 最後ね、美知と大志の結婚式の三日後に私死ぬの。ドラマチックでしょ。だから、最後の最後だけ美知が書いたっていう体になってるんだけど。

大志 え、結婚式、挙げてないじゃん。

沙知 そうだけど。でもいいじゃん。いいでしょ？

大志 んー。

沙知 会社、行かないの？とりあえず、ご飯、食べたなら？ 美知、帰っ

てこないね。

大志 ……うるさい！

沙知 え。

大志 お前のせいだろ！

沙知 ……

大志 あ、ごめん、違う、俺のせいだ。俺のせいだ！

沙知 大丈夫。大丈夫だから。

大志 何が大丈夫なんだよ！全部大丈夫じゃないよ！あ、ごめん、俺の

せいなのに、ごめん。

沙知 落ち着いて、ね。落ち着いて。

大志 ねえ、一緒に心中しない？

沙知 は？

大志 このまま終わらせない？人生の一番いいところ、ちょっと過ぎたあたりになっちゃったけど、このまま落ちてくよりほき、いいよね。

沙知 え、私関係ない。

大志 関係あるよ！一緒に行くんだよ！お前のせいでもあるだろう！

インターホン。

何度も何度も鳴り続ける。

大志 うるさいなあ……うるさいなあ……！！

沙知が出て行く。

隼人が入ってくる。

沙知 なに？

隼人 大志、どうした？

大志 兄ちゃん。

隼人 え、なにこれ。

大志 兄ちゃん、みんなが明るくなれる方法考えた？。

隼人 ちよつと待って、それどころじゃなくて。

大志 それどころだろ！

隼人 いや、ちよつと。沙知、早く、逃げて。

沙知 は？

隼人 明香が。

沙知 え、奥さんが？

明香が入ってくる。

明香 ドア、空いてたけど。

隼人 話し合えばわかる。まず、話し合おう。

明香 もういいの、私そういうの。

隼人 なにもいいことないって。

明香 多分、私、これで満足。刑務所入っても、思い残すことない。

隼人 沙知、逃げて。

明香が、バックから包丁を出して握る。

沙知逃げる。

明香 逃げんじゃないわよ！これぐらいの覚悟あってやってたんでしょ。
沙知 なんのことです？

明香 いいわよ、どうせだったら私も一緒に死んでやってもいいから。
大志 え。

明香 大志くん、ごめんね、この部屋使っちゃうけど。

大志 じゃあ、僕も。

明香 は？

大志 僕も一緒に死にます。みんな死にましょう！ほら、兄ちゃんも。

それがさ、明るくなれる方法だよ！

隼人 え、嫌だよ。

明香 大志くん、それはちよつと違うんじゃない？

大志 いいじゃないですか！死にましょうよ！ほら！死にましょう！

明香と大志が包丁を奪い合って床に落ちる。
それを拾おうとする明香を隼人が止める。

隼人 やめろ！やめろって。

隼人が明香を突き飛ばす。

隼人 やめろって言うてんだろ！

明香 あんたが偉そうなこと言うてんじゃないわよ！

明香が隼人を突き飛ばす。

隼人 お前、ふざけんな！

隼人が明香に掴みかかる。

明香 なに？逆ギレ！逆ギレじゃんこれ！

隼人 いい加減にしろよお前。

隼人と明香が取っ組み合いになる。
それをなぎ倒して止める沙知。

沙知 なんの意味もない！こんな何の意味もない！

気づくと大志が包丁を持っている。

大志 誰から行く？ねえ誰から行く？僕から行く？

3人、後ずさる。

そこに、渡辺が入ってきて、迷いなく沙知を殴り飛ばす。

一瞬気絶するほどに。

空気が固まる。

渡辺 こんにちはー。

大志・隼人・明香 こんにちはー。

美知が入ってくる。

美知 ただいまー。あ、なんか賑やか。

大志 美知。

美知 ちょっと待っててね。

沙知を乱暴に起こし座らせる渡辺。

意識が戻った沙知は抵抗し始めるが、

美知と渡辺で押さえつけて、手足をガムテープでぐるぐる巻きにする。

明香 ちょっと何やってるの？

隼人 君たち！君たちやめろ！

大志 美知、なにやってんの？

美知 あ、お取り込み中ごめんね。

隼人 おい、いい加減にしろ！

隼人が渡辺に掴みかかるが、逆に殴り飛ばされる。

渡辺　まだ、邪魔します？

美知が、バックから道具をバラバラ出し始める。
人を殺せる凶器の数々。

とはいえ、銃やスタンガン、ということではなく、
美知と渡辺が、どうやって沙知を殺したいか、をホーム
センターやドラッグストアや、そういった普通に入れる
店舗で、かき集めて来た品々。
それを美知が一つ一つ出しながら。

美知　マレーシアのセマイ族って知ってる？一日の大半を夢の話して、
憎むことを知らない部族なんだって。

大志　それ、俺がした話。
美知　1950年代、イギリスがマレーシアでゲリラ部隊を結成して、
セマイ族も参加することになったんだけど、戦いに出たセマイ族
の人たち、急に人が変わって、狂気に取り憑かれたみたいに、人
を殺しまくったんだって。

大志　……
美知　なにがいい？
沙知　は？

美知　一番苦しいやつにしてあげる。ねえ、なにがいい？
沙知　嫌だ。

美知　なにがいいと思う？ねえ？
大志　え。

美知　なにがいい？
大志　わかんないよ。

美知　あ、いいもの持ってる。これにする？

大志が持っている包丁に注目する美知。

美知 準備したのより、ハプニング的なやつ、しびれるじゃん。
渡辺 いいね。すごくいい。
大志 だめだつて。
美知 ちよつと貸して。
大志 無理。
美知 はい、いいから、貸して。
大志 え。
美知 貸せよ！

無理やり包丁を奪う美知。

美知 多分、私、ずつとこうしたかったんだと思う。
渡辺 行こう！行っちゃおう！
美知 最後になんか言うことある？
沙知 ……
美知 ないか。じゃあいくよー！
沙知 死んでも恨んでやる。
美知 は？
沙知 お前は、許されない。一生、許されない。やったー！もう美知の
幸せ途切れた！嬉しくてしょうがない！もう絶対に幸せになれな
いじゃんあんた！やったー！殺せよ！罪を背負って生きろよ！し
かもよりにもよつて、あたしつていう、あんたが一番背負いたく
ないやつじゃん。
美知 黙れ！
沙知 わたし、ここで殺されて、あんたとずつと一緒に生きてくんだよ。
この先ずつと、あんたの中に、私が流れ続けるんだよ。うわー！
私の思い通り！最高の結末！もう思い残すことないわ！こんなエ
ンディングありがとう！最高のプレゼントだわ！
美知 ちくしょう。
沙知 やれよ……やれつて言ってるんだろ！
美知 ……なにこの生き物。
沙知 どうか、お幸せに！

美知が沙知の顔面めがけて包丁を振りかぶる。

振り下ろす刹那。

幸子 美知？

幸子が入ってくる。

幸子 あんたたち、なにやってんの？

ぞろぞろと道夫と知輝も入ってくる。

幸子 なにやってんの！！！！！！

それは母の気迫。

道夫 ちよっと、お母さん。

幸子 だってそうでしょ！何やってんの！

唾然として、包丁を下ろす美知。

道夫は手土産を持っている。

知輝 姉ちゃん。

大志 ……どなたです？

知輝 あ、父と、母なんですけど。

大志 あ。

道夫 初めまして。大志さんですか？

大志 はい。

道夫 あ、あと。

隼人 あ、大志の兄で、妻です。

道夫 美知がお世話になっています。すみませんこれつまらないものです
が。

隼人 あ、すみません。

幸子 渡辺くん？

渡辺 え？

幸子 渡辺くんは、ここで、なにやってるの？

渡辺 あ、いや。その。

幸子 これ、なあに？

ガムテープでぐるぐる巻きにされた沙知の手を触って、
思わず、泣き崩れてしまう幸子。

その姿を見て、一目散に沙知のガムテープを剥がす渡辺。
渡辺は剥がし終わると、ふっと我に帰った顔をして。

渡辺 ……失礼します。

渡辺 出ていく。

道夫 すみません、うちの娘が。昔から、喧嘩すると、際限なくて。
隼人 あ、いえいえ。

道夫、大志の前に立ち、
包丁を持ったままの美知と並んで。

道夫 こんな、娘で、不束者ですが、これからも、宜しくお願いします。

大志 ……ちよつと、無理かもしれないです。

道夫 はい？

大志 ごめんなさい。別れても、いいですか。すみません。別れます。

道夫 そうですか。

大志 はい、すみません。

美知 え？

大志 なんか、ごめん、でもさすがに厳しいわ。

美知 うん。

大志 また、荷物、取りにくるね。じゃあ、なんか、すみません。

美知 大志。

明香 あ、じゃあ、ということは、私たちも、ね？

隼人 あ、そうか。じゃあ。
道夫 すみません、お騒がせしてしまつて。
隼人 いやいや。じゃあ、大志行くか。
大志 うん。
明香 それじゃあ、失礼します。

大志、隼人、明香、出ていく。

道夫、美知の手から包丁を取る。

道夫 二人とも、もう、いいか？喧嘩はやめろ。
沙知 ……
美知 ……
道夫 仲直りするまで、帰ってくるな。いいか？

しとしと泣いている幸子。

道夫 お母さん、行くか。
幸子 (頷く)
知輝 え、だって、この状況。
道夫 いいから、いくぞ。

道夫、幸子、知輝出ていく。

美知と沙知、ボロボロで、二人きり。

沙知 ……え、あなた、結婚は？
美知 は？
沙知 大志くん、追いかけた方がいいんじゃないの？
美知 ……いや、もう、無理でしょ。
沙知 え……なんか、ごめん。
美知 あんたどの面下げて言つてんだよ。
沙知 え、ほんとに、なんか、うそ。

美知 は？

沙知 全然、脈絡ないんだけど、あんまりにも、辛いかも。

美知 ちよつと。泣きたいのはこっちの方だし。

沙知 どうしよ。どうすんの？

美知 どうもできないでしょ。

沙知 うそ、なんか、本当に、ごめん。

美知 はあ？今更意味わかんないわ。

沙知 そうだよ。私も、そう思う。でも、なんか、え？

美知 は？

沙知 結婚はしたら？

美知 バカじゃないの。だから。

沙知 そうだよ。

美知 そうだよ。

沙知 え、なんか、急に、辛いわ。ごめん。

美知 だから、泣きたいのはこっちの方だって。

沙知 ごめんごめん。

日が陰ってくる。

美知 ちよつと。

沙知 うん。

美知 ……あんたさ、結局、いつまで生きるの？

沙知 ん？

美知 余命宣告されたんですよ。

沙知 ああ。

美知 やっぱり嘘なんですよ。

沙知 あの。

美知 うん。

沙知 5年生存率40パーセント。

美知 あ。

沙知 らしいよ。

美知 ……あ、そう。

沙知 うん。

美知　　そっか。
沙知　　このまま治療しないと。
美知　　え？
沙知　　治療しないと5年40パーセント。
美知　　……いや、治療しろよ。ばか。
沙知　　お金ない。
美知　　働け。
沙知　　働いてるし。
美知　　はあ？
沙知　　んー。
美知　　……貸すから。
沙知　　いや、それはさすがに。
美知　　ちゃんと返してよ。
沙知　　……うん。
沙知　　……大志くんは、私なんとかする。
美知　　いやいや。
沙知　　命かけてどうにかするから。
美知　　バカじゃないの。

　　少しだけ、目が合う二人。

美知　　なんか、お腹減った。
沙知　　確かに。
美知　　食べに行っちゃう？
沙知　　出たわ、正社員の発想。
美知　　いや、だってさすがにお姉ちゃんのおごりでしょ。
沙知　　はあ？だから、お金ないってば。
美知　　いや、これから結構な大金貸すんだけど。
沙知　　無理だわ。
美知　　いや、ケチすぎるでしょ？少しは姉の自覚持てよ。
沙知　　最悪ワリカンなら行ってもいいけど。
美知　　最悪って何？最悪って。
沙知　　だってなんで美知と二人でご飯食べなきゃいけないの？

美知 いやこっちのセリフだし。
沙知 え、行くの？
美知 しょうがないじゃんお腹減ったんだから。
沙知 あーあ、しんどいわー。
美知 じゃあ、一人で餓死しろ。
沙知 それは嫌だ。
美知 なんなの、腹たつわ！

夕日が二人を照らす。
ユスリカが光るように。

終わり。

上演許可は「東京夜光」までご連絡ください。
メールアドレス： tokyoyako@gmail.com